士幌町

佐瀬瑠真

1. 概要･歴史

1.1　由来

アイヌ語の「シュー・オル・ペツ」（鍋を漬ける川）から。伝説によれば、昔この地に忍び込んだ盗賊が村人に見咎められ、鍋を水に漬けたままで逃げたからという。

1.2　町章

1968 年に制定され、士幌町の「士」を図案化したものであり、鵬が大空にはばたく姿を表し、町の将来への一大雄飛を意味している。下部の円形は、町の円満、融和、団結を表す。

図 1　士幌町の町章

出所：wikipedia

1.3　歴史

十勝国の開発は、1886 年(明治 19 年)1 月の北海道庁開設で軌道に乗り始めた。士幌町の本格的入植の始まりは、1898 年(明治 31 年)3 月のことである。

1891 年（明治 24 年）に岐阜県で設立された美濃開墾合資会社が中士幌地区に入植し、それと共に士幌発展の基礎が築かれた。当時の町を開拓した美濃開墾合資会社の中の入植者には、濃尾地震と水害の被害を受けた者が多かったため、その頃の岐阜県が士幌への入植を勧誘し、移住する人が多くなったようだ。

1921 年（大正 10 年）には、音更村の一部と分村を果たし、 同時に音更村（現音更町）から音更村、東士狩（ひがししかり）村、凋寒（しぼさむ）村の 3 大字の各一部が分村した。こうして、川上村となる。村名の由来は音更川の川上にあったためだ。同年、3 大字を行政字に再編し、音更村には士幌、中士幌、上士幌、中音更、上音更、東士狩村には、ウリマク、凋寒村にはワッカクンネップ、イショッポとなった。

1925 年（大正 14 年）4 月には、川合村（現池田町）のうち、大字居辺村の一部を編入し、字・居辺となり、1926 年（大正 15 年）6 月には、道内に類似の地名があったため、川上村から士幌村に改称する。

1931 年（昭和 6 年）4 月は、上士幌、上音更、居辺の 3 字の各一部を上士幌村（現上士幌町）として分村した。

そして 1933 年（昭和 8 年）6 月に、池田町の大字居辺村の一部（下居辺地区）を編入し、1962 年(昭和 37 年)11 月 町に昇格し、士幌町となる。

2. 位置･自然･気象

2.1　位置

東経 143 度 15 分､北緯 43 度 10 分に位置する。面積は、259.13km² で、東西に 25.6km、南北は 17.1km に広がっている。

十勝総合振興局北部に所在していて、郡は河東郡に所在する。隣接自治体は、鹿追町、音更町、池田町、本別町、上士幌町である。

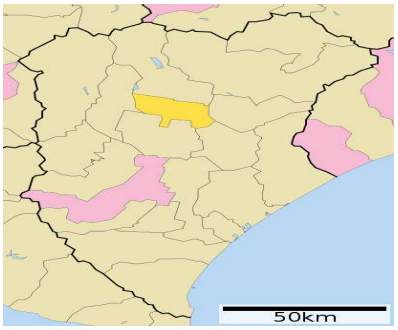
図 2　士幌町の位置(道内)

出所：十勝情報サイト

2.2　自然

北部から南部にかけてゆるい傾斜をなす。中部は平野が広がる畑作地帯、東部、西部には丘陵地帯がある。大雪山系から流れ出る音更川の両岸に広がる平坦な大地を中心として、西部に大雪山系の東ヌプカウシ（1,252m）がそびえ、東部には佐倉山系の丘陵が連なり、居辺川をはさんだ数段の丘陵からなっている。河川は音更川、士幌川、居辺川が流れている。土壌は、典型的な火山灰地からなり、冷涼な気候とともに、本町の農業生産を特色付けるものとなっている。

図 3　士幌町の位置(管内)



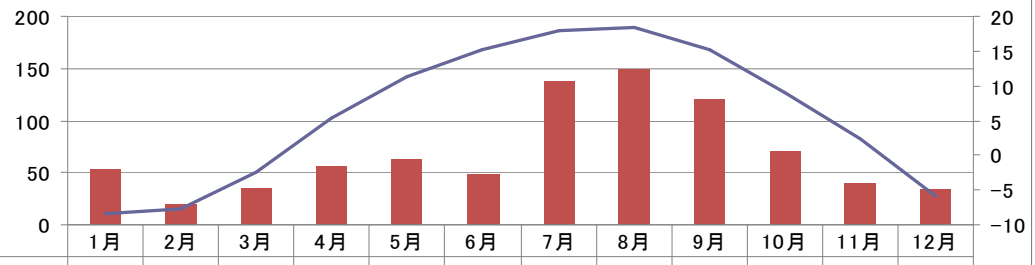
出所：wikipedia

2.3　気象

気象は内陸性で夏冬の温度差が甚だしく、冬期の乾燥極値が著しい。平均気温は 6.5 度で冬期は-20 度以下になることもある。

積雪量は比較的少ないが、季節風が吹き荒れる日が多く、また土壌凍結が深部に達するため春耕期が遅くなる。一方で、夏の 7、8 月の降水量は非常に高くなっている。

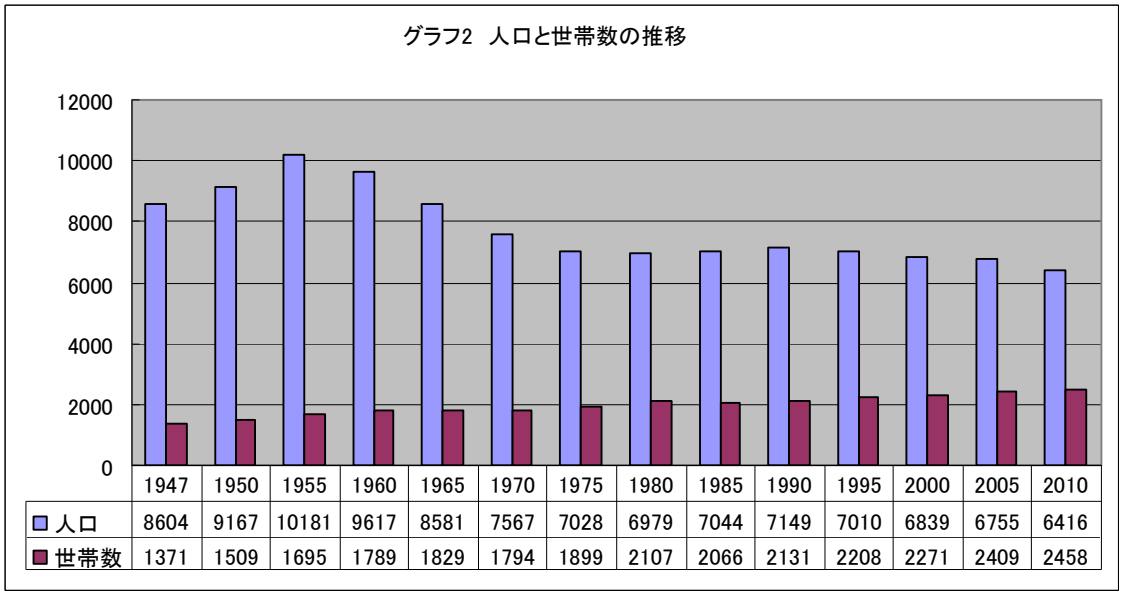
グラフ1　2000年～2004年まで月別平均気温（℃）と月別降水量（mm）



	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均降水量	53.6	19.3	35.7	56.3	62	48.1	136.7	149.1	120.7	70.3	39.3	33
平均気温	−8.3	−7.8	−2.5	5.4	11.2	15.1	18	18.5	15.1	9	2.4	−5.8

出所：士幌町 HP

3.　人口



	1947	1950	1955	1960	1965	1970	1975	1980	1985	1990	1995	2000	2005	2010
人口	8604	9167	10181	9617	8581	7567	7028	6979	7044	7149	7010	6839	6755	6416
世帯数	1371	1509	1695	1789	1829	1794	1899	2107	2066	2131	2208	2271	2409	2458

出所：国勢調査

2010 年の国勢調査によると、総人口は 6,416 人となっており、男女別に見てみると、男性が 3,063 人、女性 3,353 人になっている。ちなみに、年少人口は 911 人、老齢人口は 1,731 人である。総世帯数は、2,458 世帯数である。

グラフ 2 より、人口数が 1955 年をピークに 1,0181 人と最も多くなっている。これは、全国ではじめて東洋一の規模の連続工程式合理化澱粉工場が建設され、馬鈴薯耕作は士幌農業の基幹作物として不動のものとなり、産業の活発化し、それに伴い、人が流れ込んできたためだと考える。それ以降、1965 年までは 8,000 人を超えていたが、1970 年から 8,000 人を切ってしまった。それ以降も、7,000 人あたりをうろついていたのが徐々に減少していき、2011 年では、最小の 6,416 人にまでなってしまった。

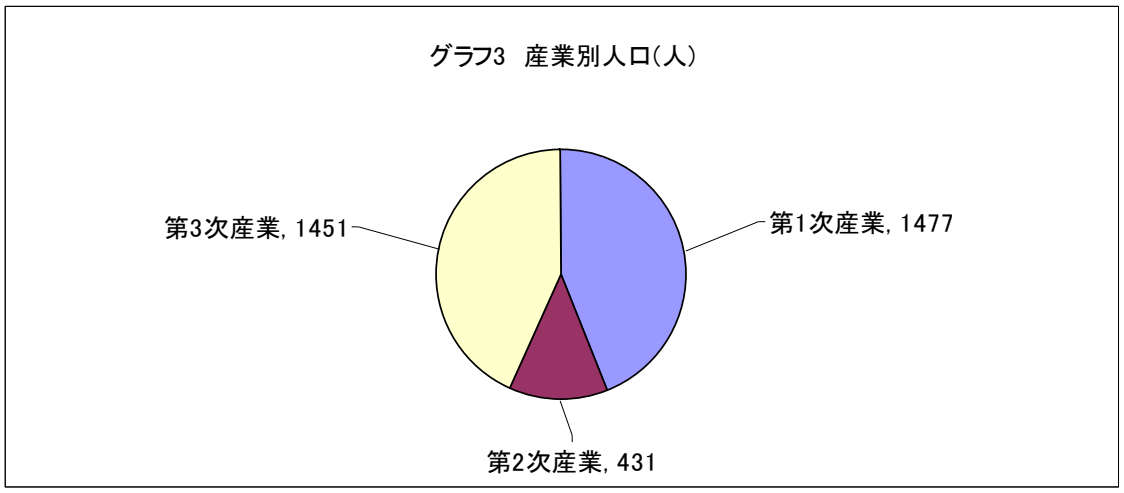
それとは一方で、世帯数は 1947 年から見ると核家族化の影響から、最近に至ってはほぼ倍増していることが見てとれる。

4.　産業

4.1　産業別人口

産業別人口を見てみると、第 1 次産業は人口のうちの 42.7%、第 2 次産業は 14.5%、第 3 次産業は 42.8%となっており、他の地域に比べ、非常に第 1 次産業者の割合が多い。これは、農業が非常に盛んに行われていることをよく表している。

下のグラフは、産業別の人口数を示している。第 1 次産業が 1477.44 人と、第 3 次産業をわずかに抜き、最も多い割合となっている。



出所：国勢調査

4.2　農業

総土地面積 25,913ha のうちの、畑耕地面積は 16,000ha。また、農業経営体数は 407 経営体のうち、家族経営体数が 396 経営体、組織経営体数が 11 経営体と、経営が家族型中心になっている。

画像 1　士幌町の農村と地帯

出所：士幌町 HP

経営は主として畑作（馬鈴薯・甜菜・小麦・豆類）と畜産（酪農・肉牛）を主体に、農民資本を中心とした生産・加工・流通諸施設の機能を生かし、消費者に安心してもらえる産物の生産を行っている。農業協同組合が生産から加工・流通と、大規模な合理化・多角化を進めた結果、全国的にも希に見る強靭な経済団体として成長し、農業協同組合でありながら全国高額所得法人の常連として名を連ね、長らく全国農業協同組合連合会の頂点に君臨し続けていた。

近年では、持続可能な農業生産の基礎として 4 年輪作体系の確立を最重点課題として取組み、計画を遵守した生産により『馬鈴薯』『小麦』『てん菜』『豆類/スイートコーン』がそれぞれ 1/4 の作付け比率となっている。また、輪作体系の中で堆肥の投入についても積極的に行っており、畜産農家から堆肥の提供を受ける替わりに、畑作農家が小麦の麦わらを牛の敷料として提供する循環型の農業を展開している。

緑肥の導入にも積極的に取り組んでおり、堆肥を含めた有機物の投入は小麦跡の 85%となっており、導入緑肥のうち 8 割が馬鈴薯における「そうか病」等の土壌病害低減効果の高い野生エン麦を選択し導入している。さらに圃場の酸度矯正・石灰質の補給として、てん菜糖の製造過程での副産物であるライムケーキの導入を推進しており、作物の永続的な生産と、資源の有効活用による環境に配慮した土づくりを実践している。

堆肥や緑肥といった有機物施用を行いながら輪作体系を遵守し、また土壌分析や新規銘柄を活用することにより、過剰な化学肥料の投入を防止するとともに、さらなる投入量の削減を目指している。農薬についてはドリフト（周辺への飛散）させない取組や低水量・低薬量散布の効果検証など、環境負荷の低減を推進しており、また、使用後の農薬容器や栽培用資材などの廃棄物については、JA 青年部が中心となって受入・分別作業を実施し、適正な処理に取り組んでいるようだ。

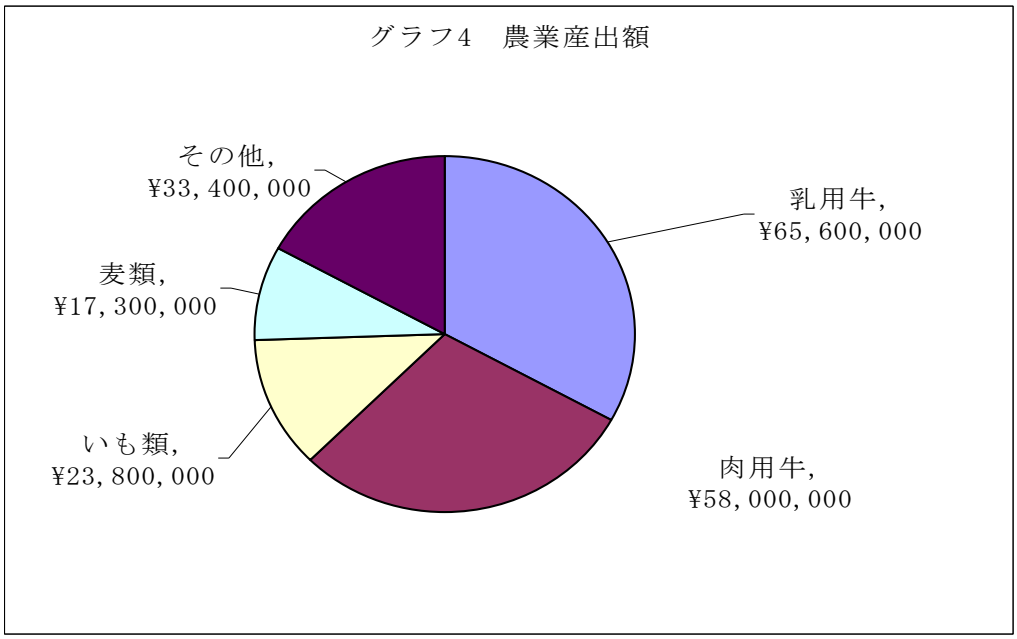
4.3　特産物の栽培面積･収穫量

最も生産活動が行われている生産物はてんさいで、栽培面積 2230ha、収穫量 110800t となっている。次に馬鈴薯で、栽培面積 2150ha、収穫量 69700t、続いて小麦が栽培面積 2610ha、収穫量 7260t となっている。その上、大豆が 270ha、834t、小豆 758ha、2050t、いんげん 475ha、792t となっており、豆類の生産も行われている。また、酪農も行われているがために、飼料作物も多く作られているようだ。

画像 2　てんさい(十勝産)

出所：士幌町 HP

4.4　農業出産額



出所：農林水産省 HP

グラフ 4 より、乳用牛と肉用牛が大半を占めており、畜産がさかんに行われていることが見て取れる。次に、いも類や麦などといった穀物が多くなっており、畑作も活発に生産されている。

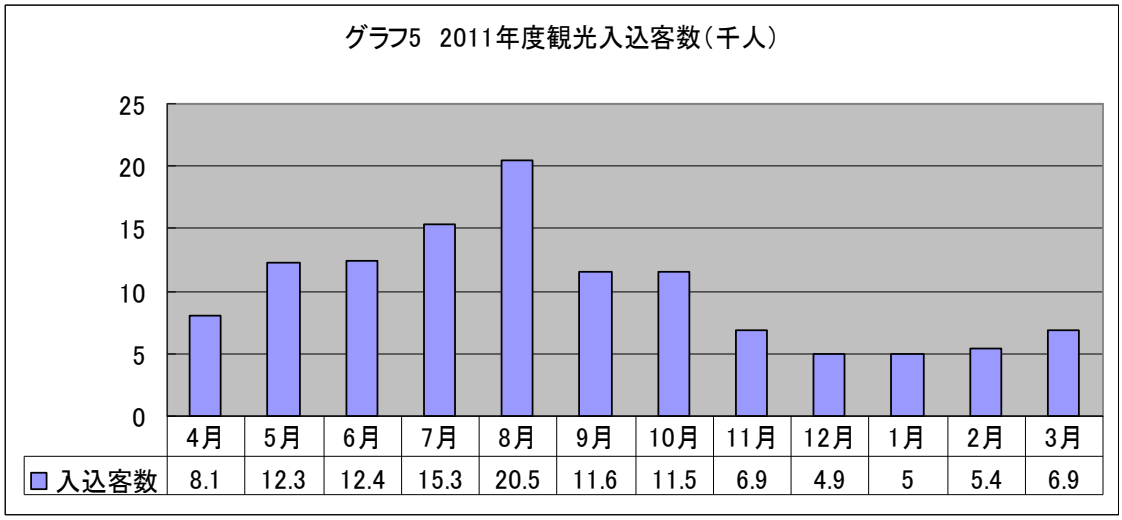
4.5　その他の産業(漁業・林業)

漁業に至っては、ほとんど行われていない模様で、ほとんどデータが見られない。唯一行われているのは、内水面養殖業である。養殖池数：21 面、養殖面積：11620m²、養殖業従事者数：7 人、営んだ経営体数：3 経営体と極めて少ない状態だ。

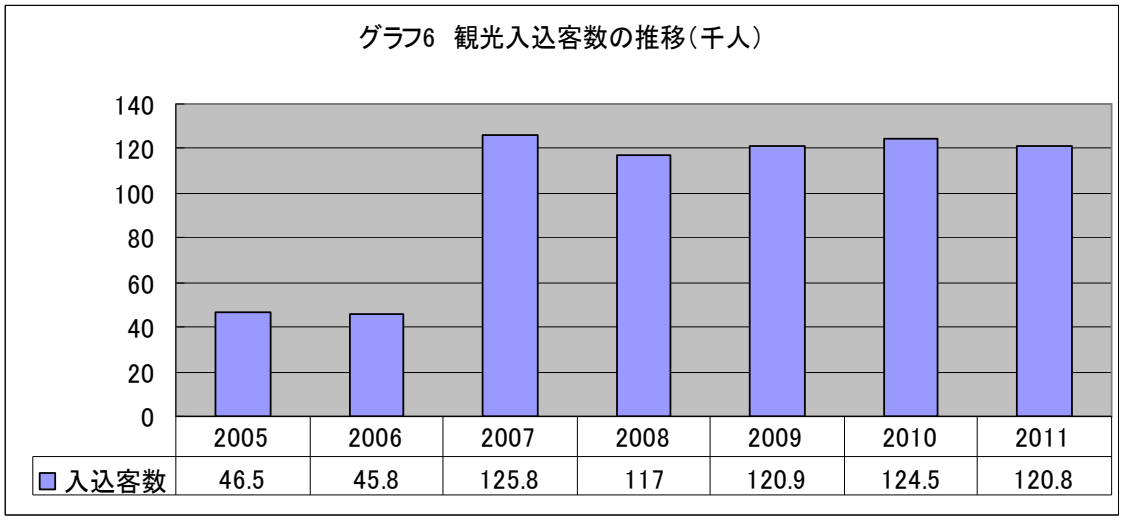
最後に林業についてだが、林野面積率が全国で 65.7%、北海道で 66.5%であるのに対し、士幌町では 23.3%と非常に少ない数値になっている。面積が 6175ha（0.１%）と乏しいのに連なり、林業経営体数が 77 経営体(0.7%)、林家数も 124 戸と少なくなっている。

5. 観光

5.1　観光入込客数



出所：十勝総合振興局



出所：十勝総合振興局

グラフ 5 より、まず月別観光客数を見てみると、4 月から 8 月にかけて気温が高くなるにつれて、観光客数は多くなっている。しかし、8 月をピークに 9 月以降は気温の低下に伴い、観光客数は非常に少ないものになっている。次に、グラフ 6 の年間観光客数の推移については、2006 年に士幌高原ヌプカの里がオープンしたため観光客数は激増し、その後も士幌温泉プラザ緑風などといった新しい施設も創設されたことでほぼ同じ数値を維持している。

5.2　観光名所

5.2.1　士幌高原ヌプカの里

ヌプカの里は標高 600mメートルの士幌高原にあり、十勝平野を一望できる。

ロッジヌプカを中心に、格安の料金で利用できるコテージや、キャンプ場、バーベキューハウス、マウンテンバイクなど多彩な楽しみができる。

晴れた日の夜の星空は、抜群の模様である。

画像 3　士幌高原

出所：士幌町 HP

5.2.2　しほろ温泉プラザ緑風

2001 年 10 月にオープンした新しい温泉施設だ。お湯は世界でも珍しい、純植物性のモール温泉になっている。茶褐色のお湯はお肌をしっとり、なめらかにし「美人の湯」と呼ばれていて女性に非常に人気がある。大小の浴槽や広い露天風呂、サウナや寝湯も完備されている。

画像 4　しほろ温泉

出所：士幌町 HP

5.2.3　道の駅ピア 21 しほろ

国道 241 号線沿いにある、ひときわ目立つ赤い風車が目印だ。道の駅「ピア 21 しほろ」は、お土産がそろう士幌物産館と、士幌牛の料理などなどが楽しめるレストランもある。

地元の牛乳を使って製造しているアイスクリームやソフトクリームが大人気であるそうだ。

画像 5　道の駅

出所：士幌町 HP

その他、体験実習を通して、開拓当時からの先人の農業や生活を知り、たくましい開拓精神を学ぶことを目的とした美濃の家･伝統農業保存伝承館や、農業記念館、旧国鉄士幌線｢士幌駅｣が当時のままの姿で保存されている士幌交通公園などがある。また、大きなイベントとしては、8 月にある「しほろ 7000 人のまつり」や 10 月の「しほろ収穫祭」がある。

画像 6　しほろ 7000 人の祭り

出所：士幌町 HP

士幌町観光情報 http://www.shihoro.jp/hp/kanko/index.htm

JA 士幌町 http://www.ja-shihoro.or.jp/index.html

士幌町 HP http://www.shihoro.jp/

農林水産省「わがマチ･わがムラ http://www.machimura.maff.go.jp/machi/

北海道庁「過去の国政調査結果」http://www.pref.hokkaido.lg.jp/ss/tuk/001ppc/co.htm

士幌町総論　www.shihoro.jp/hp/plan/soukei10.pdf

士幌町 sikipedia　http://ja.wikipedia.org/wiki/%E5%A3%AB%E5%B9%8C%E7%94%BA